

しかし、65歳以上であっても自分のことが楽しくできる人はほとんど下に降りてきてもらって上に乗っている人を支える、地域の人たちと助け合いながらこの町で生活していくスタイルをつくっていく。そういう仕組みづくりのお手伝いをしていくことが、この「生活支援コーディネーター」の仕事だと思っています。

現在、このコーディネーターの業務として立ち上げを企画しているものに「ちょいサポ」というサービスがあります。

この「ちょいサポ」は、有償ボランティアである「サポーター」の方が、高齢者や障がいのある方およびそのご家族など、支援を必要としている方の「ちょっとした日常作業」をお手伝いするという仕組みです。例えば、高齢者の方で「洗濯物が乾かないから、コインランドリーに持って行きたい。でも交通手段がない」という困りごとがあったとき、サポーター登録者にお願いでその作業を依頼する、というような流れです。

普段の生活の中でどうしてもできないことだけを地域の皆さんが助けてくれたら、その高齢者の方も「まだ自立して生きていけるな」と思えるわけですよ。そういう支援の手が励みになることで、この町で長く健康で自立して生活できる人たちを増やしていきたいと考えています。

そしてこの作業は完全無償というわけではなく、チケット制の有料サービスとする予定です。そうすることで、地域の「お互いさま」の気持ちを尊重しながらも、依頼する側も遠慮なく頼むことができるのではと思っています。

まだ実証実験の段階ではありませんが、皆さんからどのようなサービス項目が必要とされるのかを聞き取りながら、本格的なサービス開始を目指していきたいと考えています。何より、多くの町民の皆さんに「サポーター」に登録していただくことが不可欠ですので、ご理解・ご協力をいただけるように情報発信していきたいと思っています。



## 伊

豆の賀茂地域でも、この地域と似たような状況を抱えていまして、現在こんなことをやっているという話をベースに話させていたきたいと思います。

賀茂地域では、住民サービスの提供体制の安定化や観光振興、教育水準の維持などのために、広域連携体制の強化に力を入れています。

そのひとつに、「あるかも会議」があります。これは、伊豆縦貫自動車道が全線開通する15〜20年後を見据えたときに、「あるべき」「賀茂地域」はどのようなものか、という将来像を地元住民が考える会議です。賀茂地域の産業・経済のつながりを分析した上で、地元小中高校の児童・生徒を対象にしたアンケートの実施や、地域住民の意見交換会として「あるかも会議」を賀茂地域の各市町にて開催しました。今後、それらの意見を取りまとめる予定です。

それから、持続可能な観光振興を目指す「伊豆観光局」の取り組みを紹介いたします。ここでは、現場の声を施策に反映させるため、若手旅館経営者をはじめ若者60人との意見交換を伊豆半島各地で開催しました。例えばその中では、賀茂地域には多くの自転車愛好家が訪れるものの、なかなか経済効果につながらない現状についても話題になりました。その原因のひとつには、彼らは自転車で移動

## 地域振興の第一歩は 地域の魅力と現状を 住民が認識すること

静岡県  
土屋 優行 副知事



する以上、最低限の荷物しか持たないということがあります。そこで、お土産や特産品を気兼ねなく購入してもらえよう、宿泊した旅館から次に宿泊する旅館へと荷物を配送するサービスのアイデアが生まれまし。こうした意見交換の機会を持ち地域や業種の枠を越えて交流することによって「稼げる」観光に向けた柔軟な提案が共有できただけでなく、人材発掘とネットワークの構築という効果も得ることができました。それから、川根本町を含む南アル



昨年10月に開催されたエコパークツアー。川根高校の生徒が、地域資源の魅力やガイドの役割を学んだ。

プスのエリアはユネスコエコパークに認定されていますが、伊豆半島も貴重な地形や地質を生かし「ユネスコグローバルジオパーク」への登録認定に向けて取り組んでいるところ。また、伊豆地域で盛んな「静岡わさび」について、栽培方法の農業遺産への登録も目指しています。これについても、この地域ではすでに「茶草場農法」が世界農業遺産に登録されています。しかし、いずれの取り組みも、登録されることが目的やゴールではありません。登録されたら世界への情報発信の機会が増えますが、だからといって何もしなくてもお客さんが来たり、売上につながったりするわけではありません。地元住民が「ここってすごいところ

なんだ」という思いを共有することや、わさびで言えば、栽培に取り組んでいる農家が自信を持つこと。こうしたことが、登録に向けた取り組みや、登録を機会としてこれから観光客の呼び込みや農業振興を進めていく上での、大きな課題となります。

私が旧中川根町役場に着任したとき、町民の方に「ここは良いところだから、フィルムコミッション（映画の撮影誘致）をやったら良いと思います」と話した記憶があります。でも「ここには何もないから、誘致してもしょうがないじゃん」と言われたのです。そうではなくて、この地域の住民自身ももっと自信を持ち、自慢をしていける風土の醸成が必要です。

伊豆半島に修善寺というところがあります。そこでは、商工会やNPO法人が地元の小学生と協力して、地域の観光情報をまとめたフリーペーパーを作りました。小学生に記者となってもらい、お寺や旅館取材してもらったわけです。その結果、冊子としてもとても良いものができたのですが、それだけでなく、子どもたちが「本当は良いところがたくさんあったんだ」という思いを持つようになり始めたのです。同じように、この町でも、子どもたちが地域に誇りを持つきっかけとなるような活動をやっていくということが必要かなと、私は考えます。



おもな質問と回答

**A2(西原氏)**「干渉すぎないこと」ですかね。もちろん仕事についてはきちっとチェックしますが、町外から新規就農してきた若者の多くは「自然体」でいられることを求めています。たわけですから、仕事以外の日常生活については、のびのびと過ごせるように配慮しています。

**Q3** 島田市川根町(旧川根町)も含めた「川根地域」について、行政の枠をこえた交流・つながりの可能性は、どのように考えていますか。

**A3(濱谷氏)** 私たちは町内で3軒の「農家民宿」に携わっていますが、旧川根町にも2軒の農家民宿があり、川根地域全体を盛り上げたいという同じ志のもと連携を深めています。また「スポーツクラブ」についても、旧川根町内の小学校を会場に開催することもあり、これからもスポーツを通した川根地域の住民の交流を続けていければと思います。

**Q1** 伊豆半島では道路の整備が進んでいると思いますが、この大井川地域でも、ストレスなく通行できる道路の整備が待たれます。地元住民として、どのような働きかけや活動をしていく必要があると思いますか。

**A1(土屋氏)** 伊豆半島においては、県や市町などの行政機関だけでなく、民間企業や住民も一緒になって国に要望活動を行っている事例があります。その中でも、観光振興のみならず「住民にとっては『命の道』である」というように「本当に困っているんだ」という姿を見せていくことが大切だと感じています。

**Q2** 西原さんが、若者を多く雇用している中で、接し方として気をつけていることを教えてください。

**A3(土屋氏)** 経済活動や人のつながりにおいて行政区は関係ありません。例えば伊豆地域でも、富士や箱根エリアと連携して県境のない地図を作成するなど、観光客の利便性向上のための取り組みを実施しています。また、福祉分野においても、行政区の境目に近い地域同士については双方が相互乗り合いできるようなサービスが構築されると、住民にとっては非常に便利だと思います。